

Vol.2 コラム

ESD プラットフォーム WILL は神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマンコミュニティ創成研究センター（HCセンター）を事務局として、2019

年より発足しました。その背景には2006年から続くESDの実践があります。「ESD ボランティア ぼらぼん」をはじめ、「大船渡 ESD プロジェクト」「ESD 学び隊」など、多様なプロジェクトが積み重ねられてきました。これらを牽引してきたふりーズ（松岡広路）にESDとWILLについての思いをご寄稿いただきました。

ねぐら(塹)を

探し移ろふ

元は「鳥の巢」を指す言葉だったらしい。「ねぐら」とは、あらゆる動き回る生き物が——安心して休むことのできる場のことをいう。漢字が「土へん」「時」の合わせ文字であるところが絶妙だ。空間と時間、すなわち安心して休むことのできる「時空間」ということであろう。「寢座」とも書くようだ。文字通り、寝る場(座)、あるいは寝ることも座ることも自由な場、ということであろうか。

自分のねぐらはどこであったか、と振り返ってみる。1960年生まれ私の最初のねぐらは、広島県の片田舎にある小さな「二戸」(にこいち)の市営住宅であった。緑と土に囲まれた、縁側と四畳半の二間、それに狭苦しい便所と台所のついた小さな木造の住まいだったと記憶している。隣近所の付き合いは密だったのだろう。そこに居たのは5歳くらいの保育所時代までだったが、当時の隣人の顔も名前も、さらには具体的な情景まで鮮明に覚えている。近所のお兄ちゃんやお姉ちゃんの後について田んぼで遊んだこと。少し裕福で自宅に電話がある家へ借りに行き、かけ方を教わったこと。なぜか保育所に行きたくなくて駄々をこねていた時、2歳上の近所のお姉さんが優しく手を引いて連れていってくれたこと。今から60年ほど前の情景が、ふと懐かしく蘇ってくる。

それでも、今にして思えば、丘の側面に造成されたその新興住宅地は、地域からは浮いた空間だったに違いない。「地(じ)の子」たちからは「市営住宅の子」と呼ばれ、時折取っ組み合いの喧嘩をした記憶もある。外でさまざまな経験をしながらも、帰れば羽を休められるねぐらを、幸運にも私は持っていた。

その後も私のねぐらは親から提供され続けたが、高校を卒業すると、自らねぐらを選ぶ経験をすることになる。ねぐら選びは当然、収入に左右されるが、私の基準は中学生時代に読んだ武者小路実篤の小説『真理先生』に登場する「先生」の住まいであった。舞台は太平洋戦争直後。「真理先生」と呼ばれる世捨て人の居宅には多種多様な人たちが訪れ、それぞれ身勝手に喋り、思惑を吐露しあう。そのうちの一人、好奇心旺盛な学生が本書の主人公だ。彼の語りを通して、先生のねぐらで繰り広げられる人間模様が描かれる。主な訪問者は、才能を認められつつある兄と、石ばかりを頑なに描き続け「馬鹿」と呼ばれる弟の画家兄弟、その弟が心を寄せるも振られる美貌の娘、そして先生の弟子を自認する人々。どうやらこの小説は、後半で先生が真理を説くくだりに重きがあるようだが、私には、多様な人間模様の舞台となつた「先生のねぐら」の面白さが、鮮烈な印象として残っていた。



そのせいか、私が最初に選んだのは、東京都文京区にある戦前からの古いお屋敷の一角を貸し間とした下宿だった。明治・大正期の文豪が住んでいたのではないかと思わせる、気品ある木造建築が立ち並ぶ街区。その一角に、その宿坊があった。土塀に囲まれ、小ぶりながら瓦屋根の門もある。「書生」という響きにぴったりのねぐらだった。……と言えば聞こえはいいが、実はボロボロの壊れかけた住宅で、のちに近所の人から「幽霊屋敷」と呼ばれていることが判明した。1980年代初頭とはいえ、トイレは水洗ではなく「ぼとん便所」。歩けば足が抜けそうな板張りの廊下。部屋は3つほどあったが、私以外の住人はいない。一度だけ韓国からの留学生が入居したが、「こんなところに人が住めるか!」と年老いた大家さんに悪態をついて出ていってしまった。家賃は3万円弱だったろうか。立地の良さゆえ安くはなかったが、収支バランスよりも、そこが私のイメージする「真理先生の家」に重なったことで、2年ほどそこをねぐらとした。

当時は自己探求的な時空間を求めていたのだろうか。現実の私の志向、つまり「多様な人との出会いをアクティブに求める傾向」にはそぐわない場であったが、今思えば、稲原美苗先生の奨める「哲学カフェ」のような時空間をねぐらに求めていたのかもしれない。人が集いつつも、心静かに哲学をする空間。当時は感覚的に選んでいたただけだが、矛盾しつつも調和する可能性を秘めた、素敵な時空間であつたと思う。

その後、求めるねぐらの質を見極められないまま、私はねぐらを移り続けていった。詳細は省くが、いまだ「納得するねぐら」には行き着いていない。ただ、徐々に「脱個人化」してきた自覚はある。ねぐらが大学の自治会室であつた時も、友人宅や大学院の院生室であつた時もある。バンングラデシユ人の在日労働支援をしていた時は、彼らの隠れ家をねぐらにした。同居人が複数あるいは流動的であることは、私のねぐら変遷の特徴だ。私にとってねぐらとは、羽を休める場であると同時に、ある時は親しい人と語り、ある時は仲間と共に動く準備をする「拠点」でもあつた。それゆえ最近はこの思う。ねぐらは自分一人では選べないのかもしれない。居場所や出会いの質は移ろうものであり、どんなねぐらが最適かを悩んでいる時こそが、実は幸せなのかもしれない。と、ねぐら探しは、いまだ迷走中といったところである。

しかし、目を転じてボランティアプログラムやESDの推進体制の在り方を見つめると、この「ねぐら探し」は実に大切なことのように思える。

ねぐらは、その人や集団の行動半径、人間関係、社会関係を規定し、活動の質を担保する。平たく言えば、ねぐらをどこに置くかで、自ずと出会う人、活動場面、見えてくる問題が決まるのではないか(ボランティア活動に迷っている人は、問いを「ねぐらをどこにするか」に換えてみていいかもしれない)。ねぐらは本質的に独りでは決められないが、探し続けることはできる。それによって人は、ねぐらごとに明確になる「当事者性」を豊かにし、やがて複数の当事者性を有機的に重ねていく。身をもつて現実を知り、多くの関係者に出会い、やりたいことをやる。そこで新たな知的好奇心がわく。それを可能にするのが「ねぐら」ではないか。我が人生を振り返ると、ねぐらにはこうした意味があると考えている。

現在、WILLの「ねぐら」となっているABEE(神戸大学A棟1階)は、神戸大学ESDコースが始まつた2006年に開設された。Action Base of Empowerment and Educationの頭文字をとつたもので、「エンパワメントと教育のための活動拠点」が正式名称である。しかし、開設当初に冗談めかしてささやかれていたのは、「AB(アブノーマル)でE(ええやん!)ESD」であつた。ESDを面白おかしいものに変える場、それがABEEということであつた。



WILLの前身である「ESDボランティアばらばん」のメンバーの中には、文字通りABEEをねぐらにする「つまり、自分のアパートではなくABEEで寝泊まりする」強者(つわもの)もいた。長時間にわたって仲間とお喋りし、酒を酌み交わし、時には勉強や読書をしなから、傷ついた羽を休めていたのだろうか。それとも、下宿とABEEを、質の異なる二つのねぐらとして使い分けていたのか。いずれにせよ、微笑ましい光景だ。ねぐらが複数あり、そこを自由に行き来するのは、実にESD的な暮らし方の一つかもしれない。

こんな雑感を新年に語るのは不謹慎だ、と感じる向きもある。申し訳ない。もつと真面目にESDの現在・過去・未来を語るべきだ、という自覚はある。しかし、まあ、いいではないか。「アブノーマルでええやん!」に免じて。

ねぐらをテーマに据えたのは、ESDを進める上で重視される「居場所」や「プラットフォーム」という理念が、どこか泥臭さに欠け、よそよそしく、人の心の奥に届かないもののように感じるからだ。生きる過程で、人は多くのねぐらを見つける。ある時は独りねぐらに潜り込み、ある時は人を招いて親しさや優しさに興じる。そしてまたある時は、愛を紡ぐ準備をする。泥臭い自分ならではのねぐらを探しながら、多様な当事者性を交差させるチャンスを探る。こうした「ねぐら」こそが、ESD推進の前提条件ではないだろうか。WILLは、これからどんな人のねぐらになっていくのだろうか。

ねぐら(塘)を探し移ろうべし。その「移ろひ」を現実のものとし得る社会には、何が必要か。こうした問いの立て方もありそうだ。

ふりーズ(松岡 広路)